

子どもの居場所としての学童保育

益田 美紀

額に汗して、きょうもセミとり

夏も終わりごろになると、鳴いていたセミたちが低く飛び、小学生たちにも十分捕まえられる高さの所に止まるようになります。じっと見つめ、「逃げなよー」と祈りながら虫取り網をかけたのですが、わずかに手元が狂い、セミはさらに上の枝に飛んでいってしまいました。

「おまえがさあ、揺らすからだぞ！」と、見ていた

一年生二人に向かって、三年生のA君。そうそう、何か言わずにはいられないものね、と私は思いました。そしてもう一人の一年生が、「A君、あつちにいたよ、早く、来て」と呼びにやってきました。

私が勤務している学童クラブでは、夏休み中も自分のおもちゃは持ち込まない約束なので、何回か補修して年季の入ったこの虫取り網も共用で取り合っています（もちろん譲り合って、が理想です）使います。

二、三年生が一通り捕まえると、一年生にも順番が

回ってきます。「ほらっ、この高さなら届くだろ？ やってみろ」と三年生が教える場面もあります。A君はちよつと短気で言葉遣いは荒っぽいけど、虫が大好きな一年生にとつて憧れの存在なのです。

学童クラブは昼間のきょうだい

子どもたちは学校が終わると「ただいま！」とランドセルを背負つて帰ってきます。学童クラブは鍵つ子たちの家庭に代わる場として設置され、そこに通う子どもたちは、かつて「昼間のきょうだい」と言われていました。今は入会を希望する児童が多く、学童クラブの規模は年々大きくなり、私の学童クラブは四十名定員ですが、自治体によつては百名以上のところもあり「きょうだい」というには、あまりに人数が多くなり過ぎてしまいました。

学童クラブの運営は自治体により公設公営、公設民営、父母会運営、社会福祉法人委託、民設民営な

どさまざまです。保育料も四千元から、おけいこごと送迎サービス付きの二万円までと差があります。しかし、どの学童クラブの指導員も、安心して放課後を過ごさせたい、そして単なるランドセル置き場にしたいと思つています。

「子どもの生活から『三つの間、さんま』が失われた」とよく言われますが、学童クラブには狭いながらも「空間」あり、「時間」あり、何より「仲間」がいます。メンバーが変わり、バリエーションがあつても、縄跳びが好きな子どもたちは毎日縄跳びをし、鬼ごっこが好きな子どもたちはきょうもやつている、学童クラブはそんな場所です。こまがはやると手作りのこま台の周りを十数人で囲んで、技を磨き、新しい技を誰かが思いつくと、年度を越えて伝えられ、当の本人が卒業した後まで技は残つて、遊びの伝承ができる場所です。

毎月一回は誕生会として全員で遊ぶのですが、

「集まって、誕生会をするよ」と声をかけると、「じゃあ、今日は遊べないね」という返答が必ずあります。それほど子どもたちは企画された行事と自由遊びを分けて考えているようです。保護者と合同の縁日や発表会などの行事、ほかの学童クラブとの交流行事などを通じて、子どもたちの意欲を引き出し、仲間意識を育てる一方で、自由に遊べる時間を確保していく必要性を感じます。

就学は親子共に一つの節目

学童クラブは「就労等により保育に欠ける子ども」ということが入会の条件です。厚生労働省の調査によると、全国平均で約二割の一〜三年生が学童クラブに在籍しています。

幼稚園卒園児の家庭では、就学を機会に母親が新たに仕事を始めたり、勤務時間を延ばしたりするケースが多くあります。また保育園卒園児の場合

は、保育園に比べ学童クラブは開所時間が短く、私のところは午後六時までなので、二重保育を頼むか、子どもが鍵を開けて留守番をして親の帰りを待たなければならぬという家庭が多くあります。就学はただ単に学校と学童クラブという二つの集団生活が始まるというだけでなく、子どもたちにとって生活そのものが大きく変わる時なのです。

広い校舎と校庭、お兄さん、お姉さんと一緒に過ごす学校生活、親から離れて登下校することに期待感をもって新学期がスタートします。それは自分で考え、任されることが多くなり、独り立ちの時期にあたります。が、教師一人で大勢の子どもたちに指導をする授業の方式になじみず、立ち歩いてしまうとか、教師に注意されるとかっとなってしまうという子どもたちが年々増え、授業が成立しにくくなっていると聞きます。

就学したからといって何でも一人でできるように

なるわけではなく、まだまだ大人の援助が必要で
す。学校の慣れない環境で疲れた心と体をゆつくり
休め、友達とよい関係を作るを手助けし、学校
が好きになるように、一年生の春は特に保護者と共
に私たち指導員が支えていく役目があると思ってい
ます。

親にも仲間が必要

今年の春の保護者会のことです。一年間の運営に
ついて私たちからお話してから、出席されたお母
さん方から自己紹介を兼ねて一言ずつ話していただ
きました。「体力がなくて夕ご飯まで起きていたら
ない。朝まで眠ったまま」「学童クラブのことは話
してくるけど、学校のことは全然話さない。一体
どんなふうに過ごしているのやら」「鍵をたびたび
忘れ、困ってお隣さんの家の上がりこんでいる」
と、一年生のお母さん。

「帰ったら眠くなる前に食べられるようにおにぎり
を作っておきましたよ」「学校のことは時間がたつ
から忘れてしまうんですね、うちもそう。様子が聞
きたかったらあらかじめ先生にお願いして時間をつ
くってもらおうといいですよ」「鍵はコイルのキーホ
ルダーが便利でランドセルに付けたまま。でも、本
当は一人で鍵を開けるのが嫌で、わざと忘れていく
のかな?」といくつかアドバイスが二、三年生のお
母さんから出されました。

そして、こんなやりとりをうなずきながら静かに
聞いていた二年生のお父さんが、次のように話され
ました。「皆さんのご心配はもつともでしょう。私
も四年生の長女の入学の時には心配しました。で
も、いくら心配したところで、一生親が付いていて
やれるわけではないのです。わが子の力を信じて後
押ししてやりましょう」。

この発言の後、皆の表情が明るくなり、場が和や

かな雰囲気になりました。指導員の私ではなく、子育てをする仲間のお父さんから出た言葉だったことがとても意義のあるものだったのです。「わが子の力を信じましょう」。これほど勇気づけられた言葉はなかったと思います。親も一緒に悩んだり、楽しいことを共有し合ったりできる仲間が欲しいのです。

保護者に伝えたいこと

毎年感じるのは保護者の思いも家庭環境も実にさまざまで、家庭によって何と違うことかということですね。そういう中に身を置く子どもたちが学童クラブで一緒に過ごすのですから、トラブル（けんか、学童クラブの行きしぶり、下校中の寄り道、持ち物のやりとりや破損など）が起きないはずはありません。起きて当たり前として、それを解決し、乗り越え、仲間として許し合い、再び楽しい時間を共有で



きるようになることが子どもの成長の機会となるのではないのでしょうか。

けんかの後、その日には謝れなくても、次の日に「一緒に遊ぼう」と誘いかけて関係を修復することもできます。子どもたちには、自分の気持ちを言葉で表現させて話し合われます。また、時には学童クラブ全体の問題として皆で考える場面をつくって解決の方法を一緒に探ります。そして保護者にはトラブルをていねいに伝えつつ、援助し、見守るようお

願っています。

個人面談では「お手伝いをしていますか」と必ずお聞きします。自分のことが自分でできるのはもちろん大切なことですが、何か一つ家族のために働くことがとても大事だと思います。「かわいくて手伝いなんてさせられない」「祖父母がいるので手伝うことなんて何もない」という家庭もあります。でも子どもは常にかわいがられ、保護されるだけの存在でよいのでしょうか。

子どもたちは、好奇心の塊で新しいことを覚えたがっていますし、自分も人の役に立ちたいと思っています。学童クラブでは面倒をかけることがあってもいいけれど、自分も人の面倒を引き受けてあげるよ、そんな気持ちでいてほしいと思います。年の違う子どもたちが生活する場だからこそ、年長者の力量が発揮される場面が多くあります。私も、その力を引き出せる学童クラブの運営を心がけています。

今後の子どもたちの居場所は・・・

昨年、厚生労働省と文部科学省から出された「放課後子どもプラン」は、すべての小学校区で放課後の健やかな活動場所を確保する目的で、地域の方やボランティアの大学生と過ごす地域子ども教室と学童クラブを実施するものです。

二つの事業を連携して行うか、一体化して行うかは自治体に任されています。どちらにしても、子どもの居場所となる新たな制度が始まるにあたり、「時間」「空間」「仲間」と、「お帰り」と言って迎え入れてくれる大人がいることを保障し、地域の人たちと保護者がつながって子どもたちの成長に立ち合える場となることを願ってやみません。

A君らが仲間たちと一緒に夢中になって遊び、そこで子どもたちの笑顔が輝いてこそ、子どもの居場所の証なのですから。
(学童クラブ指導員)